

## 教育心理学教室教官の研究状況報告

### 研究経過報告 久世文雄

幼児を対象にした社会化に関する研究および「児童の心身発達の追跡研究」は、ともに、現在、資料を検討している段階である。

また、青年心理の研究は、目下、中学生および高校生の社会的態度の検討を行なっている。

この1年間の成果は、以下のとおりである。

1. 勤労青年の自己開放性についての研究 名古屋市青小年問題協議会 昭和49年6月
2. 中学生・高校生の社会的態度に関する研究(1) (速水氏と共同) 教育心理学科紀要 21巻 昭和49年7月
3. いわゆる過疎地域の家族関係(12)―離村者の追跡調査を通して― (過疎研究グループメンバーと共同) 教育心理学科紀要 21巻 昭和49年7月
4. 面接調査および調査法についての検討 續 有恒著「調査」 金子書房 昭和49年9月
5. 対人的反応特性、および家庭における人間関係 近藤貞次編 社会心理学 朝倉書店 昭和50年4月
6. 家族関係の教育心理学的研究―社会化を中心に― (小嶋氏、長田氏と共同) 教育心理学年報 第14集 昭和50年5月

### 研究経過報告 ― この一年 ― 丸井文男

#### 1. 自閉児に関する研究

われわれの研究グループで、大学院生の研修を兼ねて自閉児の治療をはじめて以来、6年目になる。最近は、来訪する事例の80%まで、自閉傾向の子供達である。このような傾向は、一施設で、集中的にある研究がすすむと、常に起こる現象で、研究をすすめる上では、のぞましい傾向であるが、教育機関でもあるわれわれのところでは、もう少しバラエティのある事例が欲しいので、この点、やや偏りすぎるくらいが出てきている。一方、研究グループのメンバーは、年年増加し、現在20名を越える状況である。

1) 研究テーマの中心は、自閉児の発達過程による類型化の研究であるが、治療事例の追跡によって、漸く、その方向が明確になりつつある。

2) 自閉児の集団適応に関する研究は、本紀要21巻に第1報告を掲載したが、その後の経過について、追跡を継続中である。症児のすべてにおいて、入園期、あるいは、就学期になると、集団への参加の可否、いかなる学校へ入学可能なのかなど、重要な問題であり、第2報告をする予定である。即ち、最近、次第に、受け入れ側の理解が増しているが、教師の指導方針は、まだ極めて、未分化の段階にあり、われわれの究極のねらいも、この指導方針を少しでも明確化しうればと思っている。一方、

この分野の研究は、現場の教師との共同研究が必要であり、県立コロニーの養護学校の情緒障害児学級をはじめとして、県下にある自閉児を中心とする普通学校併設の情緒障害児学級および、特殊学級のなかに自閉児をもつ学級担任をふくめ、計7名の教師とわれわれグループとの共同研究班をつくり、昭和49年秋から、月1回の研究会をもちはじめている。ここでは、指導の実験経験と、本研究室での治療経験とを統合し、集団適応の研究の深まりと、ひろがりを探索中である。

3) 更に、第3の課題としては、自閉症候群の発生機序とその病因についての解明である。これには、現在までには、諸説があり、少なくとも過去10数年進展をみない。対人関係障害と言語発達障害とか中核症状であることはほぼ定説となっているが、これの発生因については、定かでない。これを症候群の精神病理学的な分析を個々の事例について得て行くことを試みている。

なお、1974年8月中旬から9月上旬まで、約25日間、ヨーロッパの8ヶ国の心身障害施設の視察団の団長として参加した。この間、私個人の目的は、自閉症研究のメッカであるウィーン大学のAsperger, H教授のもとと、ロンドン大学のRutter, M教授への訪問であったが、この2つの目的は、ほぼ達せられ、多くの収穫を得た。停年をあと2年にひかえた68才の老碩学 アスペルガー

## 研究経過報告 蔭山英順

昭和49年10月1日に新制度の臨床心理系の助手として着任し、臨床心理相談室において、自閉症児の遊戯治療を中心とした臨床実践に追いまわされ、すでに半年が経過してしまっただけでなく、大学における臨床家として重要な研究の柱においては、今、反省するに努力の足りなさを痛感している。

着任前より協同研究として、丸井教授を中心とする自閉症研究グループ、精神健康研究グループの2グループに所属し、前者では自閉児の発達研究を、後者では青年期の精神健康について研究を進めてきた。そのまとめとして、自閉児に関する研究においては日本教育心理学会第16回総会において「自閉児の集団適応に関する研究」「自閉児の言語発達の類型に関する研究」を発表してきた。また、自閉児の言語発達における病理言語の持つ意味に関して「独語」「反響言語」と対人関係発達の関連性の検討を行い、愛知教育大学神野秀雄氏との協同研究として聴覚障害—3巻2号—に「自閉児の speech に関する研究—4症例の検討—」を発表した。

現在の段階でまとめるに到っていない仕事として主に次の2つがある。

1；自閉児の言語発達に関する研究 自閉児の言語発達を典型的に把握しようとする研究の展開の中で、す

で発達した五類型に入らない発達を示す一群の存在を考えてきている。それは精神遅滞の子供が示す言語発達過程と類似している群である。すなわち始語期が遅れており、しかし一方で対人関係における自閉的障害および同一性の保持を明白に持つ群である。そこで、始語の遅れている自閉児において治療期間中に始語の出現した事例を追跡研究し、話し言葉の変化を検討している。現在、話し言葉の(1)ボキャブラリーの増加速度、(2)ボキャブラリーの品詞構成の変化、(3)文の長さの変化に関してのデータの収集を終り分析中である。こうした自閉児の言語獲得過程を対人関係の発達とからめ、単純性言語発達遅滞の事例および精神遅滞児の事例のそれと比較することにより自閉児の発達の特殊性を明確にしていこうとするものである。

また、過去の五類型のうちでも言語消失期を持つL1型に関して、消失前の状態像、消失中の状態像および再出現後の発達に関して詳細な検討を行い、教育心理学会第17回総会で発地の予定である。

2；青年期の精神健康に関する研究 主として青年期の女子の精神健康の問題として、「思春期やせ症」の事例研究により、理想自己と現実自己との統合の問題として、治験例のカウンセリング過程を現在分析中である。

## この1年の回顧と今後の展望 大橋正夫

1. ここ数年間、いわゆる印象形成モデルを手がかりとして、パーソナリティの印象形成過程の解明に取り組んできている。しかし、こうしたアプローチの有効性については教室研究会でいろいろ指摘もされたし、誰よりも私自身が鋭く気づいているつもりである。このあたりで、もっと核心に直接迫るような方法をとらなくては、と思いながら、また1年が過ぎた。さきわい昨年度は、日本心理学会第38回大会で印象形成の問題についてシンポジウムを企画し、司会するという機会を与えられた。そこで私は、従来のアプローチの限界が明らかにされればと願ったのであるが、私のこの意図がどの程度まで果たされたかについては十分確信できるまでにはいたっていない。

しかしながら、客観的な水準での成果はさておき、私

はこのシンポジウムを契機として、新しい研究の局面に進もうと、少なくとも主観的には意識し、共同研究者の方方とその問題について議論を始めた。その成果を世に問うためには後1・2年を要するであろうが、その第一歩を本年秋名古屋大学で開催される日本グループ・ダイナミックス学会第23回大会で報告することにしている。

2. 私の研究の究極的目標は対人関係の心理学の体系をつくりあげることにあることは、すでに何度も告白している。そのための階程として、これまでの諸研究者の業績を正当に評価することが必要であろう。昨年度大学院の授業でF. HeiderのThe Psychology of Interpersonal Relationsをテキストにとりあげてみた。今度この名著といわれる本を読みかえしてみ、いままで自分が彼を理解したと考えていたのがいかに皮